

# 筑後国府跡

—第293次発掘調査報告—

令和2（2020）年3月  
久留米市教育委員会

## 序

久留米市は水や緑の豊かな自然に恵まれるとともに、交通の要衝に位置し、古来より筑後地方の中心都市として栄えてきました。久留米市では市内各所に数多く残された文化財の調査を行い、市民が誇りと愛着をもつまちづくりに取り組んでおります。

本書では、筑後国府跡第 293 次調査の調査成果を報告します。今回の発掘調査とその成果を通して、久留米の歴史と文化財保護に対する理解や普及などに貢献できれば幸いです。

また、今回の発掘調査に際して、土地所有者の江嶋清子様をはじめ、近隣住民の皆様にも多大なご協力をいただきました。心より御礼申し上げます。

令和 2 年 3 月 31 日

久留米市教育委員会  
教育長 大津 秀明

## 例 言

1. 本書は、令和元年度に共同住宅建設に先立ち江嶋清子氏の委託を受けて実施した、筑後国府跡第 293 次調査の発掘調査報告書である。
2. 調査は久留米市教育委員会が調査主体となり、市民文化部文化財保護課の小川原助が担当した。
3. 遺構実測図の作成は、調査担当者と臨時職員の大熊澄子が行い、遺物実測図の作成は調査担当者と同課専任非常勤職員の米澤美詠子が行った。浄書は調査担当者が行った。
4. 遺構写真は調査担当者がデジタルカメラ Canon EOS6D Mark II を用いて、遺物写真はデジタルカメラリコー PENTAX K-1 II を用いて小川原が撮影した。
5. 図面の方位は座標北を示す。基準点の座標は、国土調査法第 II 座標系（世界測地系）を用いた。なお、平成 28 年の熊本地震に伴うパラメーター補正を行っている。
6. 遺構表記の略記号は、以下の通りである。  
SB—掘立柱建物 SI—竪穴建物 SK—土坑 SP—ピット
7. 遺物観察表の凡例は、以下の通りである。
  - ・法量の単位は cm である。（ ）の数値は復元値、現存値、—は欠損を示す。
  - ・色調は、『新版 標準土色帖』（日本色研事業株式会社、1997 年版）に拠るものである。
8. 実測図と観察表、写真図版の遺物番号は全て同一である。
9. 出土遺物・図面等諸記録は、全て久留米市埋蔵文化財センターにおいて收藏・保管されている。
10. 本調査の略記号は T K H—293、調査番号は 201903 である。
11. 本文の執筆と編集は小川原が行った。

## 本文目次

I. はじめに	1
II. 位置と環境	2
III. 調査の記録	4
IV. 総括	21

# I. はじめに

## 1. 調査に至る経緯

本調査は、共同住宅建設に伴う事前の発掘調査である。平成30年11月2日、江嶋清子氏より、久留米市東合川町字中郷72番1・2、77番9・10における「埋蔵文化財包蔵の有無」の照会が南側の個人住宅建設地と合わせて提出された。一帯は周知の遺跡である筑後国府跡に含まれ、調査地の西隣である第135次調査でピット等の遺構が確認され、調査地北側、南側で事前に実施していた確認調査においても、遺構を確認したため、開発予定地にも遺構が広がることが想定された。そのため開発対象地内の建物建設予定地部分について発掘調査が必要である旨を回答した。その後協議を重ね、共同住宅建設予定地の調査費用を原因者負担として筑後国府跡第293次調査、個人住宅建設予定地の調査費用を国庫補助と市費によって第294次調査を実施することとなった。平成31年4月3日に江嶋氏から「発掘調査の依頼」が提出されたのを受け、文化財保護法による諸手続きを済ませた後、平成31年4月25日江嶋氏と久留米市は「筑後国府跡第293次調査埋蔵文化財発掘調査委託契約書」を取り交わした。

現地調査期間は令和元年5月30日から7月26日まで、報告書作成期間は調査終了後から令和2年3月31日までである。

## 2. 調査及び報告書作成にかかる体制

調査委託者：江嶋 清子

調査主体：久留米市教育委員会 教育長：天津 秀明

調査総括：久留米市 市民文化部 部長：宮原 義治

文化芸術担当部長：竹村 政高

次 長：西村 信二

文化財保護課 課 長：水島 秀雄

課長補佐：久保田 由美

課長補佐兼主査：白木 守 丸林 禎彦

主 査：水原 道範

事務主査：塚本 映子 小澤 太郎

調査担当：小川 原励

整理担当（専任非常勤職員）：米澤 美詠子 今村 理恵 宮崎 彩香

発掘調査臨時職員

井上 知義・江藤 光男・大熊 澄子・大塚 ヒロ子・佐田 農夫男・日吉 政勝・平川 真保

発掘調査整理臨時職員

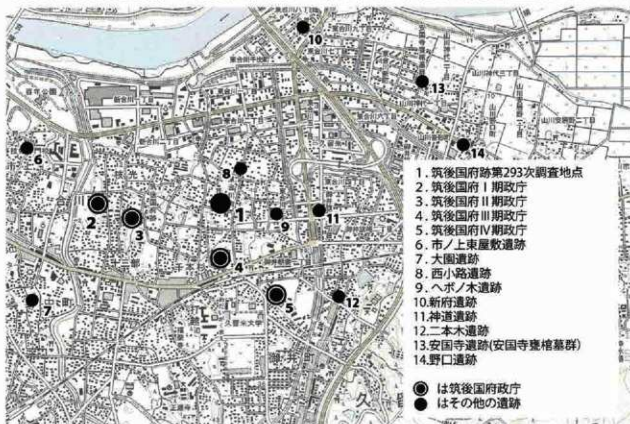
溝上 直子

### 3. 調査の目的と経過

本調査は久留米市東合川町字中郷に位置する。中郷地区では今まで発掘調査があまり行われていなかったが、古代・中世を中心とした遺構が検出されることが予測されており、その遺構の広がりの確認を調査の目的とした。令和元年5月30日、器材を搬入し、バックホウで翌31日まで表土剥ぎを行った。6月3日から遺構検出を行い、順次遺構掘削、測量、写真撮影を実施した。7月24日全景撮影のため、現場の清掃を行い、翌25日に全景写真を高所作業車で撮影した。7月26日に埋戻し作業を行い現地での調査を終了した。遺構配置図はトータルステーションを用いて測量し、測量データは「遺構くん cubic」で編集・保存した。ただし、土層図の作成は、糸切メッシュ法で行った(1/10)。

## II. 位置と環境

久留米市は、九州最大の穀倉地帯である筑紫平野の中央に位置し、交通の要衝として発展してきた。筑紫平野の南側には耳納山地が連なり、その西端には延喜式内社である高良大社が鎮座する高良山(標高312.3m)が聳える。ここから北西に派生する低位段丘上に筑後国府跡は立地し、現在の久留米市街地の東方約1.6km付近に、東西1.0km、南北0.7km程度の通称枝光台地上に展開している。遺跡の展開する枝光台地の南端には水縄断層帯が東西に伸び、断層崖下には湧水がいくつも見られる。台地の西側には高良川が、東側には井田川が流れ、北方の筑後川記濠原、南方の水縄

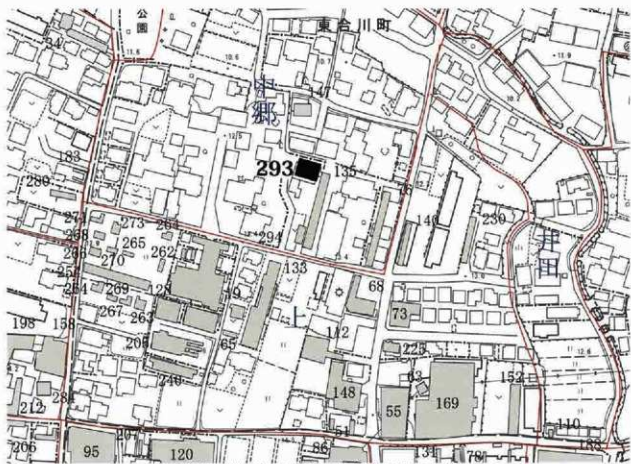


第1図 調査地点と周辺の遺跡分布図 (1/25,000)

断層系の断層崖とともに国府城の四至を画している。

耳納山地西端付近は、市内でも多くの発掘調査が行われている地域である。旧石器時代については二本木遺跡、安国寺遺跡、野口遺跡で縄文時代以降の埋土・包含層から遺物が出土している。縄文時代は前～後期の野口遺跡を始め、筑後国府跡、神道遺跡、西小路遺跡などで資料が得られている。弥生時代は中～後期の墓地とその祭祀の関係が注目される安国寺妻棺墓群を始め、筑後国府跡、市ノ上遺跡、ヘボノ木遺跡、二本木遺跡などで遺構・遺物が発見されている。古墳時代では新府遺跡や古宮遺跡、市ノ上東屋敷遺跡などで住居跡が確認されている。奈良・平安時代の遺構・遺物は筑後国府跡を中心として、多くの遺跡から発見されている。

7世紀中頃、枝光台地西端付近を中心に、大溝、土塁、河川等によって囲まれた台地上に軍事的性格が強い前身官衙の遺構群が造営される。筑後国府は筑後国が成立した7世紀末～8世紀前半にかけて、前身官衙の領域を踏襲して成立し、南北約180mの築地塀で区画された政庁的な官衙が枝光台地西端に営まれる（Ⅰ期政庁）。九州地方において律令体制が安定した時期をむかえた8世紀中頃、Ⅰ期政庁から東へ約200mに、築地塀で区画され、9世紀前半には礎石建物が築造される南北75m、東西67.5mの政庁が営まれる（Ⅱ期政庁）。Ⅱ期政庁と浅い谷を挟んだ南東約200m付近では、国司館跡も確認されている。Ⅱ期政庁は10世紀前半に火災により、焼失したと推定され、さらに東へ約600m付近にⅢ期政庁を築造している。Ⅲ期政庁は幅約4mの大溝で区画さ



第2図 調査地点の位置と周辺地形図 (1/2,500)

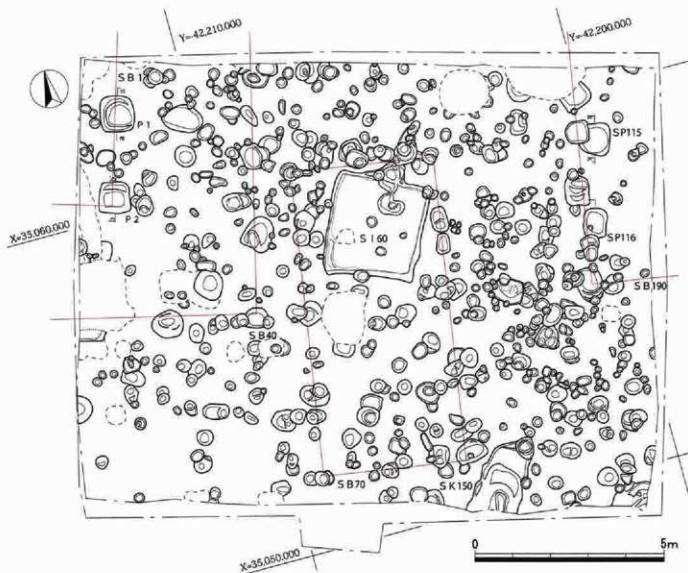
れた南北 141 m、東西 137 m の大区画の内部からは、正殿・脇殿など大型掘立柱建物が検出されている。付属する官衙群はⅢ期政庁の東側で確認されており、国司館と推定される施設も存在する。11 世紀末には南東約 400 m へ再び移転し（Ⅳ期政庁）、『高良記』に見える「今ノ符」と思われるこの政庁は 12 世紀後半頃まで存続したようである。『豊後入江文書』には、南北朝争乱期に懐良親王が国府に陣を置いた記事があり、筑後国府の名称は 15 世紀まで存続していたと推測される。

調査地は、筑後国府跡第 135 次調査の西隣、第 294 次調査の北隣に位置する。第 135・294 次調査では古代のピットを検出しているが、ともに遺構の密度は低い。

### Ⅲ. 調査の記録

#### 1. 基本層序

調査地点の現況は宅地であり、標高は南側から北側へ緩やかに下がる。調査区南部では、地表面



第3図 遺構配置図 (1/100)



第4図 調査区全景（南東上空から）

から暗灰色砂質土が20cm、礫、陶器片を含む褐色シルト質土が25cm、遺物片を含む暗褐色粘質土が15cm、遺物片、焼土を含む暗褐色粘質土が30cm堆積し、遺構検出面に達する。地山は暗褐色粘質土または黄褐色粘質土である。

## 2. 検出遺構

検出遺構は掘立柱建物4棟、竪穴建物1棟、土坑1基、ピット多数を検出した。調査面積は214㎡である。以下、主要遺構について詳述する。

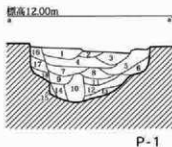
### 掘立柱建物

#### SB1（第5～9図）

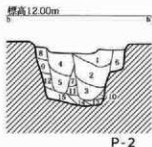
調査区北東部で検出した。柱穴は2基のみの検出であるが、柱穴の平面形や埋土が近似していることから柱穴と判断した。南北1間（2.2m）分の検出である。櫛列の可能性もあるが、調査区隅に位置し、南側に広がらないことから、掘立柱建物として報告する。柱穴は、0.8～0.95mの隅丸方形を呈し、深さ約0.5mを測る。柱痕は確認できたもので直径0.2～0.3mである。建物の計画方位はおよそN - 16.4° - Eである。埋土から土師器、瓦器、須恵器が出土した。



第5図 SB1検出状況（北西から）



- 1 暗灰色粘質土、10cm大の暗褐色土ブロックを含む。
- 2 暗灰色粘質土。
- 3 暗灰色粘質土、5cm大の赤色物を含む。
- 4 黒色粘質土、10cm大の暗褐色粘質土ブロックを含む。
- 5 暗灰色粘質土、5cm大の暗黄褐色・黄褐色土ブロックを多量に含む。
- 6 黒色粘質土、5cm大の暗褐色粘質土ブロックを含む。
- 7 黒色・暗黄褐色粘質土。
- 8 暗黄褐色粘質土、10cm大の黒色土ブロックをわずかに含む。
- 9 黒色・暗黄褐色粘質土。
- 10 暗灰色粘質土、5cm大の白・黄褐・棕色ブロックを多量に含む。



- 1 黒色粘質土。
- 2 黒色粘質土、10cm大の暗黄褐色土ブロックを多量に含む。
- 3 黒色粘質土、10cm大の暗黄褐色土ブロックを含む。
- 4 黒色粘質土、5cm大の暗黄褐色土ブロックを含む。
- 5 黒色粘質土、5~50cm大の暗黄褐色土ブロックを多量に含む。
- 6 暗褐色粘質土。
- 7 暗褐色粘質土、2~5cm大の黄褐色土ブロックを多量に含む。
- 8 黒色粘質土・暗黄褐色粘質土。
- 9 黒色粘質土、10cm大の暗黄褐色土ブロックを含む。
- 10 暗褐色粘質土、2~5cm大の黄褐色土ブロックを多量に含む。
- 11 暗褐色粘質土、5cm大の黄褐色土ブロックを多量に含む。
- 12 黒色粘質土、3cm大の黄褐色土ブロックを含む。
- 13 暗褐色粘質土、2.3cm大の黄褐色土ブロックを含む。
- 14 暗褐色粘質土、5~10cm大の黄褐色土ブロックを多量に含む。
- 15 暗褐色粘質土、10~30cm大の黄褐色土ブロックを含む。

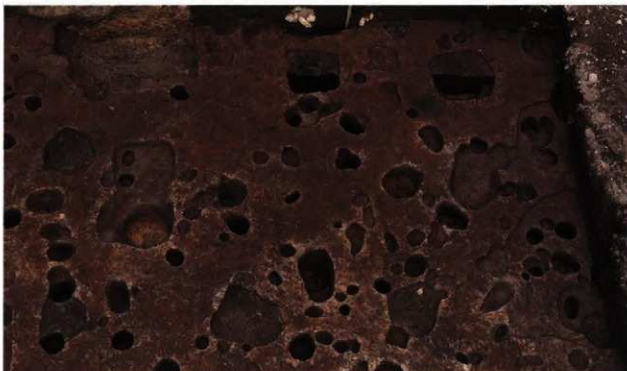
第6図 SB1土層図(1/30)



第7図 SB1P-1土層堆積状況(南東から)



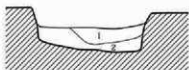
第8図 SB1P-2土層堆積状況(南東から)



第9図 SB1-40掘削状況(南東から)



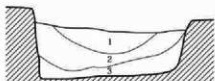
標高 12.00m



P-2

- 1 暗褐色粘質土, 5mm大の黄褐色土ブロックを含む,
- 2 暗褐色粘質土。

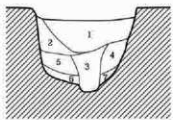
標高 12.00m



P-3

- 1 暗褐色粘質土, 5mm大の黄褐色土ブロックを多量に含む,
- 2 暗褐色粘質土, 5mm大の黄褐色土ブロックを含む,
- 3 暗褐色粘質土。

標高 12.00m



P-4

- 1 暗褐色粘質土, 5mm大の黄褐色土ブロックを含む,
- 2 暗褐色粘質土,
- 3 暗褐色粘質土, 20-30mm大の暗褐色土ブロックを含む,
- 4 黄褐色粘質土, わずかに暗褐色土を含む,
- 5 暗褐色粘質土, 20-30mm大の黄褐色粘質土ブロックを含む,
- 6 暗褐色粘質土・黄褐色粘質土,
- 7 暗褐色粘質土, 5mm大の黄褐色土ブロックを多量に含む,

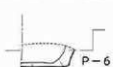
標高 12.00m



P-5

- 1 暗灰色粘質土, 5mm大の黄褐色・白色・黒色土ブロックを含む,
- 2 暗褐色粘質土,
- 3 褐・暗褐色粘質土,
- 4 暗褐・黒色粘質土を含む,
- 5 暗褐色粘質土,

0 1m



P-6



P-5



P-4



P-1



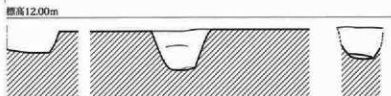
P-2



P-3



標高 12.00m



S B 40

0 2m

第 10 図 S B 40 実測図 (1/20, 1/50)



第11図 SB 40 P - 2 土層堆積状況 (南東から)



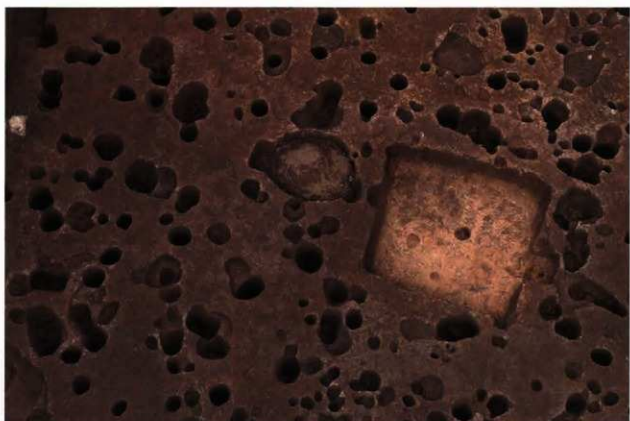
第12図 SB 40 P - 3 土層堆積状況 (南東から)



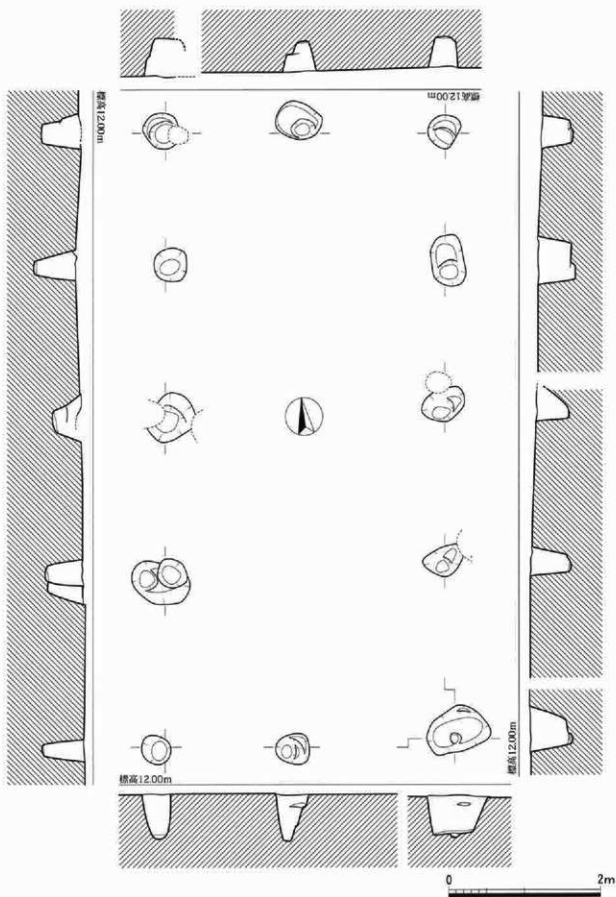
第13図 SB 40 P - 4 土層堆積状況 (南東から)



第14図 SB 40 P - 5 土層堆積状況 (南西から)



第15図 SB 70 発掘状況 (東から)



第16図 SB 70実測図 (1/50)

SB 40 (第9～14図)

調査区西部で検出した。南北3間(6.4 m)以上、東西2間(4.5 m)以上の南北棟建物と想定される。北・西部は調査区外へ広がるために詳細は不明である。柱穴は楕円形または不定形を呈し、短軸0.5 m～0.75 m、深さ0.4～0.75 mを測る。柱痕は確認できたもので直径0.2 m程度、深さ0.45 mを測る。計画方位はN - 14° - Eである。埋土から土師器、須恵器、土製品、石製品、縄文土器が出土した。

SB 70 (第15・16図)

調査区中央部で検出した。南北4間(8.1 m)、東西2間(3.8 m)の南北棟建物である。柱間寸法は西側柱列で1.8 m+2.0 m+2.1 m+2.2 m、東側柱列で1.8 m+1.8 m+2.1 m+2.4 m、北側柱列で1.8 m+2.0 m、南側柱列で柱穴は1.8 m+2.0 mである。平面形は円形または楕円形を呈し、短軸0.3 m～0.5 m、深さ0.4～0.6 mを測る。柱痕は確認できなかった。計画方位はN - 8.5° - Eである。埋土から土師器、須恵器、土製品が出土した。

SB 190 (第17・18図)

調査区東部で検出した。柱穴は3基のみであり、南北2間(4.8 m)分のみの検出であるが、柱穴の平面形や埋土が近似しており、掘立柱建物とした。柵列の可能性もあるが、SB 1と同様に南



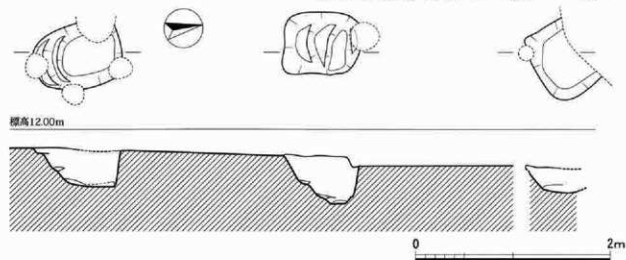
第17図 SB 190、SP 115・116 検出状況(東から)

側に広がらないことから、掘立柱建物として報告する。調査区の北・東側に展開すると考えられる。柱穴は0.6～0.9 mの隅丸方形を呈し、深さ0.3～0.5 mを測る。柱痕は確認できなかった。建物の計画方位はN - 5～15° - Eである。

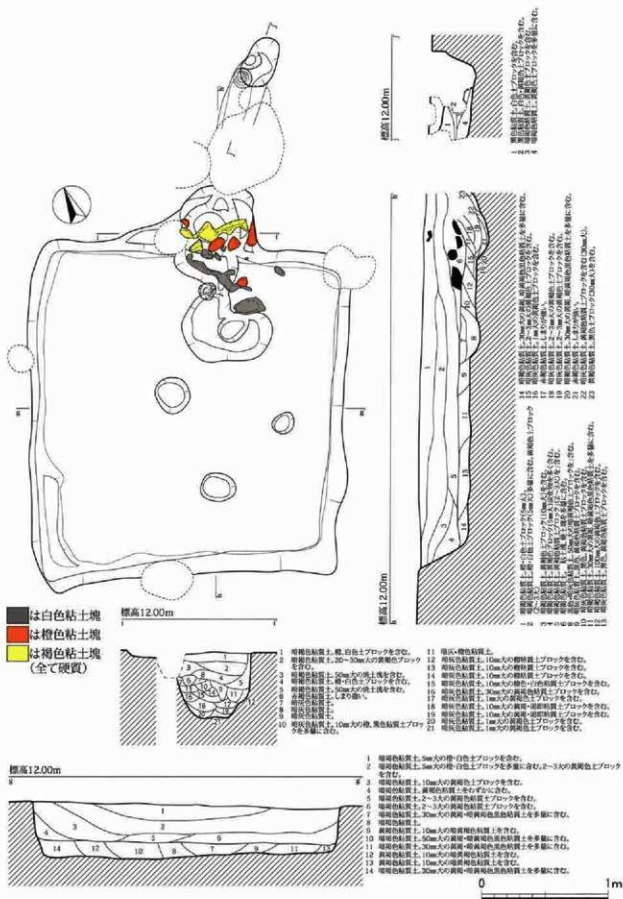
竪穴建物

S 160 (第19～27図)

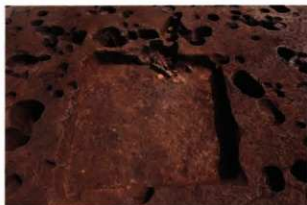
調査区中央部で検出した。竪穴建物の主軸方向はN - 24.5° - E、一



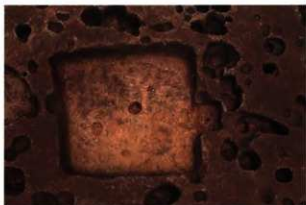
第18図 SB 190 実測図(1/40)



第19図 S160実測図(1/30)



第20図 S I 60 損傷状況 (南西から)



第21図 S I 60 完備状況 (南東上空から)



第22図 S I 60 カマド検出状況 (南西から)



第23図 S I 60 煙道土層堆積状況 (南東から)



第24図 S I 60 カマド東西土層堆積状況 (南西から)



第25図 S I 60 東西土層上部堆積状況 (南西から)



第26図 S I 60 南部土層上部堆積状況 (南東から)



第27図 S I 60 北部土層上部堆積状況 (南東から)

方、カマド部分の軸方向はN - 39° - Eである。平面形はほぼ正方形を呈し、硬化した貼床が残存した。南西部に1段テラスを有する。北部中央部には1.8 m突出したカマド部が確認され、煙道の一部には天井の地山が残存していた。煙出し口から土師器の皿、焚口に土師器の坏が伏せた状態で出土した。長辺となる南北長2.8 m、短辺となる東西長2.5 m、貼床までの深さ0.35 m、地山までの深さ0.45 mを測る。床面で検出された4基のピットは、主柱穴の可能性がある。埋土から土師器、須恵器、緑釉陶器、瓦、土製品、石製品、縄文土器が出土した。

#### 土坑

#### S K 150 (第28～29図)

調査区南東部で検出した。南部は調査区外へ延びるため全体像は不明だが、平面形は不整形を呈すると思われる。北部に4段のテラスを有する。長軸1.95 m以上、短軸1.35 m、深さ0.7 mを測り、軸方向はN - 30.5° - Eである。埋土から土師器、須恵器、輸入陶磁器、瓦器、土製品、石製品が出土した。

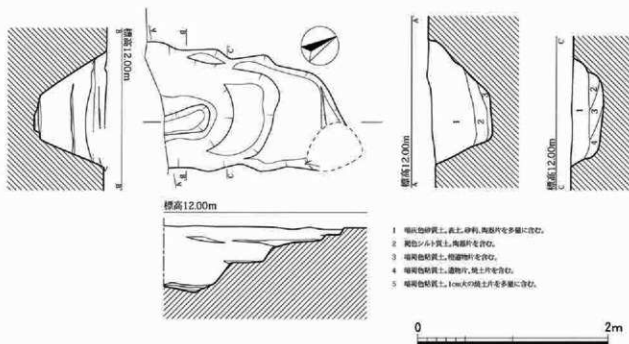
#### ピット

#### S P 115 (第30図)

調査区北東部で検出した。西部を他遺構に削平され、平面形は隅丸方形または楕円形を呈する。直径0.9 m、深さ0.3 mを測る。土層の堆積状況から掘立柱建物などの柱穴の可能性もある

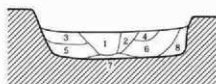


第28図 S K 150掘削状況(南東から)



第29図 S K 150実測図(1/40)

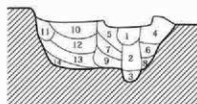
標高 11.90m



SP115

- 1 黒色粘質土。
- 2 黒色粘質土・暗褐色粘質土。
- 3 黒色粘質土・暗褐色粘質土ブロックを含む。(20cm 厚)
- 4 黒色粘質土・暗褐色粘質土ブロックを含む。(20cm 厚)
- 5 黒色粘質土・黄褐色粘質土ブロック (20cm 厚) を多量に含む。
- 6 黒色粘質土・黄褐色粘質土ブロック (20cm 厚) を多量に含む。
- 7 黒色粘質土・黄褐色土ブロックを多量に含む。(50cm 厚)
- 8 黒色粘質土・黄褐色土ブロックを多量に含む。(50cm 厚)

標高 11.90m



SP116

- 1 黒色粘質土。
- 2 暗褐色粘質土。5mm 程度の黄褐色粘質土ブロックを多量に含む。
- 3 暗褐色粘質土・黄褐色粘質土。
- 4 黄色粘質土・暗褐色粘質土。
- 5 暗褐色粘質土・黒色土ブロック (8cm 厚) を含む。
- 6 暗褐色粘質土・黒色土ブロック (10cm 厚) を含む。
- 7 暗褐色粘質土・黄褐色粘質土。
- 8 黄色粘質土。
- 9 黄色粘質土。50mm 程度の黄褐色土ブロックを含む。
- 10 黄色粘質土・暗褐色土ブロック (10cm 厚) を含む。
- 11 黄色粘質土。
- 12 暗褐色粘質土。
- 13 暗褐色粘質土・黄褐色粘質土。



第 30 図 SP 115・116 実測図 (1/20)

が、調査区隔での検出であるため、他遺構との関連が不明確であることからピットとして報告する。埋土から土師器、須恵器が出土している。

#### SP 116 (第 30 図)

調査区北東部で検出した。平面形は隅丸方形を呈する。長軸 0.8 m、短軸 0.65 m、深さ 0.4 m を測る。SP 115 と同様に、土層の堆積状況から掘立柱建物などの柱穴の可能性もあるが、調査区隔での検出であるため、他遺構との関連が不明確であることからピットとして報告する。埋土から土師器、須恵器が出土している。

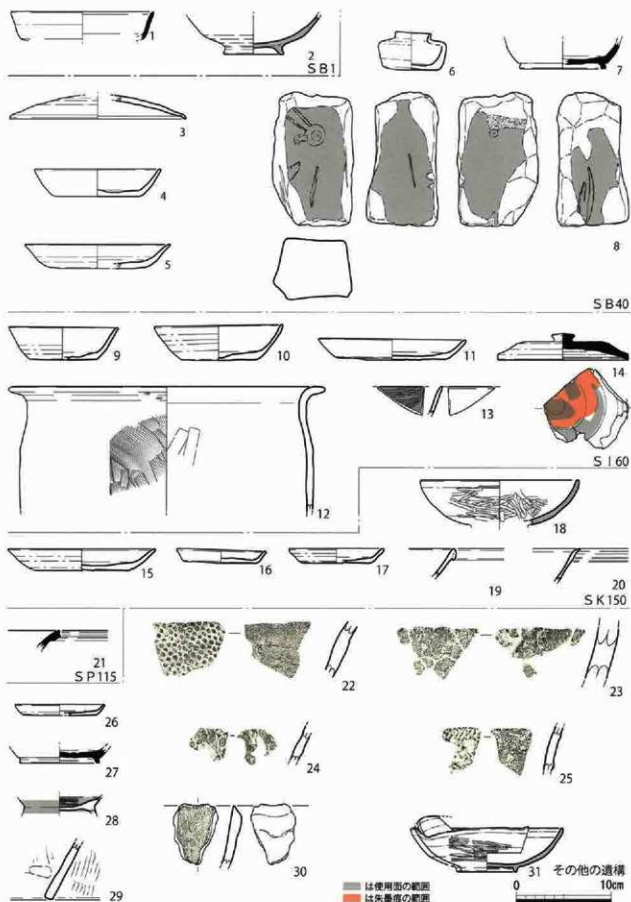
#### 3. 出土遺物 (第 31～35 図)

バンコンテナ 3 箱分の遺物が出土した。1・2 は S B 1、3～8 は S B 40、9～14 は S I 60、15～20 は S K 150、21 は S P 115 出土である。6 は完形の薬壺で、口縁が短く立ち上る。8 は磁石で、4 面を使用している。2 面に加工により、深さ 5 mm 程度の窪みを有する。14 は須恵器の蓋の転用甕で、朱墨が付着している。19・20 は白磁碗の口縁部であり、それぞれ、大宰府分類の IV 類、V 類に属する(注)。22～25 は縄文土器で、後世の遺構埋土や包含層から出土した。22・24 は楕円形、26 は山形の押型文が施される。30 は製塩土器で、内面に布目が残る。31 は瓦器坑で、著しく歪んでいる。

その他、詳細については、紙幅の都合により遺物観察表を参照されたい。

(注) 大宰府市教育委員会 2000 『大宰府条坊跡 X V 陶磁器分類』大宰府市文化財調査報告書 49 集を参考にした。

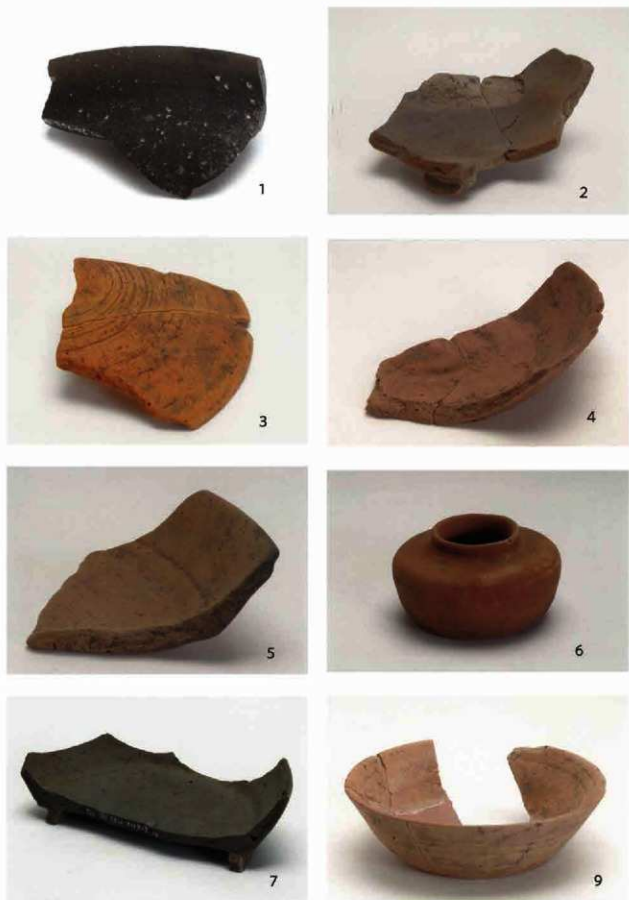




第31図 出土遺物実測図② (1/4)

出土遺物観察表

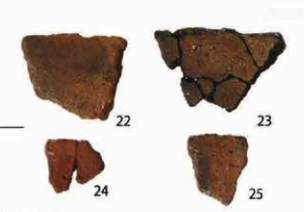
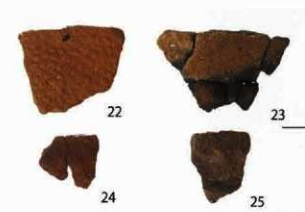
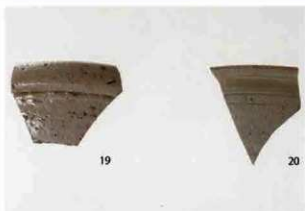
遺物No.	出土遺構	種別	器形	法量			色調		調整・文様		胎土	備考	遺物登録番号
				口取長径	高さ	器底径	内面	外面	内面	外面			
1	SB1	須臾器	皿	(15.1)	(12.9)	(3.0)	黒	緑灰	黒胎ナズ ヘラ切リ	黒胎ナズ	緑胎粒(黒色)含む		201903 000004
2	SB1	瓦器	楕	—	(6.4)	(4.1)	に広い黄	に広い黄	黒胎ナズ ヘラ切リ	ナズ	少量の緑胎粒(黒色)含む	内面緑胎粒(黒色)含む	201903 000000
3	SB40	土師器	壺	(16.6)	—	(3.0)	緑	緑	黒胎ナズ 黒胎ヘラ切リ	黒胎ナズ	緑灰		201903 000008
4	SB40	土師器	坏	(13.2)	(9.0)	2.9	緑	緑	黒胎ナズ ヘラ切リ	黒胎ナズ ナズ	緑胎粒, 赤色胎子含む		201903 000011
5	SB40	土師器	坏	(15.4)	(10.3)	2.6	に広い黄緑	に広い黄	黒胎ナズ ヘラ切リ	黒胎ナズ ナズ	緑胎粒, 赤色胎子含む		201903 000007
6	SB40	土師器	高連	3.8	5.9	4.1	緑	に広い黄緑	黒胎ナズ ヘラ切リ ナズ	黒胎ナズ ナズ	黒胎粒(黒色)含む		201903 000006
7	SB40	須臾器	坏	—	(9.1)	(3.0)	灰白	灰	黒胎ナズ ヘラ切リ ナズ	黒胎ナズ ナズ	黒胎粒(黒色)含む		201903 000010
8	SB40	石製品	砥石	14.1	8.8	7.6	緑					砂削製 重量: 1275g	201903 000012
9	SB90	土師器	坏	(11.6)	(7.2)	3.5	緑	緑	黒胎ナズ ヘラ切リ	黒胎ナズ ナズ	緑胎粒, 赤色胎子含む		201903 000013
10	SB90	土師器	坏	13.4	8.0	3.8	黄褐色	緑	黒胎ナズ ヘラ切リ ナズ	黒胎ナズ	緑胎粒, 赤色胎子含む		201903 000015
11	SB90	土師器	皿	16.6	11.8	2.3	灰緑	に広い黄緑	黒胎ナズ 黒胎ヘラ切リ ナズ	黒胎ナズ ナズ	緑灰	内面に緑胎層	201903 000018
12	SB90	土師器	壺	(33.6)	—	(13.1)	緑	明赤緑	黒胎ナズ ナズ, オサエ 黒胎層	黒胎ナズ ナズ	赤色の胎粒, 赤色胎子含む		201903 000020
13	SB90	黒色土師 土器	楕	—	—	(3.0)	に広い黄緑	黒	黒胎ナズ	土師キ	緑灰		201903 000014
14	SB90	須臾器	転用種	(13.8)	—	2.8	灰黄	灰黄	黒胎ナズ 黒胎ヘラ切リ	黒胎ナズ ナズ	緑胎粒(黒色)含む	黒色胎用 内面に黒胎層	201903 000017
15	SK160	土師器	坏	(16.6)	(10.2)	2.3 ~3.1	緑	黄褐色	黒胎ナズ ヘラ切リ	黒胎ナズ ナズ	少量の胎粒(黒色)含む		201903 000022
16	SK150	土師器	小皿	9.5	7.9	1.6	緑	緑	黒胎ナズ 赤切リ	黒胎ナズ ナズ	緑灰		201903 000024
17	SK150	土師器	小皿	(10.0)	(7.4)	1.6	黄褐色	黄褐色	黒胎ナズ 赤切リ	黒胎ナズ ナズ	黒胎粒(黒色)含む		201903 000023
18	SK150	瓦器	塊	(16.7)	—	(4.7)	灰白 緑灰, 灰	黄灰	土師キ ヘラ切リ	土師キ	少量の胎粒含む	黄緑研出し技法	201903 000025
19	SK150	白磁	碗	—	—	(3.0)	灰黄	灰黄	黄胎	黄胎	緑灰 黄褐色	3層 5層口輪	201903 000020
20	SK150	白磁	碗	—	—	(3.4)	灰白	灰白	黄胎	黄胎	緑灰 灰白色	V層	201903 000021
21	SP115	須臾器	壺	—	—	(2.9)	緑灰	灰	黒胎ナズ	黒胎ナズ	緑灰		201903 000019
22	検出面	縄文土器	鉢	—	—	(5.8)	緑	緑	洋型	ナズ	少量の胎粒(黒色, 黄褐色, 赤色)含む	外壁 縄文文	201903 000001
23	検出面	縄文土器	鉢	—	—	(6.0)	明黄緑	明黄緑	ナズ	ナズ	少量の胎粒(黒色, 赤色)含む		201903 000002
24	SP2	縄文土器	鉢	—	—	(3.5)	に広い黄緑	緑	洋型	不明	緑胎粒(黒色, 赤色)含む	外壁 縄文文	201903 000005
25	SP20	縄文土器	鉢	—	—	(5.4)	黄緑	黄緑	洋型	不明	少量の胎粒(黄褐色, 赤色)含む		201903 000006
26	SP20B	土師器	小皿	(9.5)	(8.0)	(1.2)	に広い黄緑	に広い黄緑	黒胎ナズ 赤切リ	黒胎ナズ ナズ	緑灰		201903 000029
27	SP201	須臾器	坏	—	(8.5)	(1.8)	黄灰	黄灰	黒胎ナズ ヘラ切リ	黒胎ナズ	緑胎粒(黒色)含む		201903 000026
28	SP114	黒色土師器	楕	—	—	(2.0)	黒	黒	黒胎ナズ ヘラ切リ	土師キ	緑灰	底面に緑胎層	201903 000018
29	SP184	土師器	瓶	—	—	(8.1)	に広い黄	に広い黄	胎粒目 ナズ, オサエ	ナズ	少量の胎粒(黒色)含む		201903 000033
30	SP201	土師器	製造土器	—	—	(8.2)	緑	緑	ナズ	明型	胎粒(黒色)含む		201903 000027
31	SP20B	瓦器	塊	(16.1)	(6.4)	3.7 ~5.9	灰	灰	土師キ ヘラ切リ	土師キ	砂削製含む	内面に緑胎層(黒色)含む 黄緑研出し技法	201903 000030
32	SB90	緑胎陶器	不明	—	—	(2.3)	黄褐色 灰グリーン	灰グリーン	黄胎	黄胎	緑灰		201903 000031
33	SP227	緑胎陶器	不明	—	—	(1.1)	グリーン 黄褐色	グリーン 灰	黄胎	黄胎	緑灰		201903 000032



第 32 圖 出土遺物写真①



第33图 出土遺物写真©



第34图 出土遗物写真③



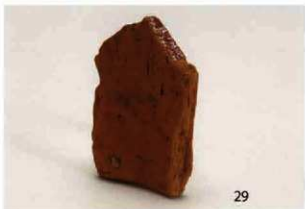
26



27



28



29



30



30



31



32

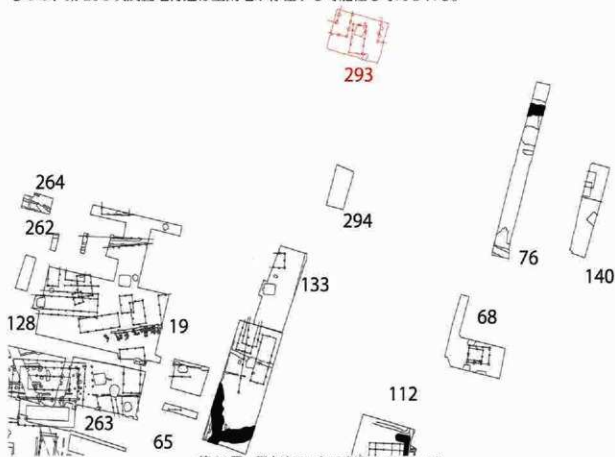
33

第35图 出土遺物写真④

#### IV. 総括

今回の調査では、8世紀後半から12世紀の掘立柱建物、竪穴建物、土坑、ピットが検出され、縄文時代から12世紀までの遺物が出土している。縄文時代の遺構は確認できず、遺物は古代以降の遺構埋土、または包含層からの出土であった。掘立柱建物は4棟確認したが、S B 70・190は細片のみの出土であったため、時期は不明である。S B 1からは瓦器塊が出土しており、10世紀以降に属すると考えられる。S B 40からは9世紀前半の遺物が出土している。S B 1・190は調査区間での検出のため、詳細は不明であるが、計画方位は近似すると想定され、近い時期に属する可能性もある。竪穴建物からは8世紀後半の遺物が出土している。S K 150からは輸入陶磁器など、12世紀代の遺物が出土している。

調査地が位置する中郷地区は、これまで発掘調査があまり行われていなかった。調査地から北側は標高が大きく下がり、古代の遺構はほとんどなく、調査地付近が国府域の北限である可能性もある。東側では第140次調査で9世紀後半から中世の遺構が検出されている。調査が行われていないが、中郷地区西部も遺構が広がる可能性がある。上地区の第263次調査では、S I 60と同時期、同規模、同形態のカマドを有するS I 3021が検出されている。第133・205次調査では、計画方位が約10°東へ傾く掘立柱建物を検出している。上地区から中郷地区にかけては、遺構が広がるものの、第294次調査地付近は空地が存在する可能性も考えられる。



第36図 調査地周辺主要遺構図 (1/1,000)

## 報告書抄録

ふりがな	ちくごくふあと ーだい293じはつくつちょうさほうこくー
書名	筑後国府跡 ー第293次発掘調査報告書ー
シリーズ名	久留米市文化財調査報告書
シリーズ番号	第418集
編者名	小川原 勲
編集機関	久留米市 市民文化部 文化財保護課
所在地	〒830-8520 福岡県久留米市城南町15番地3 TEL:0942-30-9225 FAX:0942-30-9714 Email: bunkazai@city.kurume.fukuoka.jp
発行年月日	2020(令和2年)3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	発掘 調査期間	発掘 調査面積	発掘 調査原因
		市町村	遺跡番号					
ちくごくふあと 筑後国府跡 たいしつちょうさほう 第293次調査	ふくおかけんくまもと 福岡県久留米市 くまもとしひがしくわいせいまちあざなかごら 久留米市東合川町字中郷 72番1・2、77番9・10	40203	30112	33° 15' 55"	130° 32' 48"	20190530 ～ 20190726	214㎡	記録保存調査
所収遺跡名	種別	時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
筑後国府跡 第293次調査	官衙	古代	掘立柱建物 竪穴建物 土坑 ピット	4棟 1棟 1基 多数	縄文土器、土師器、須恵器、 古瓦、輸入陶磁器、瓦器、 土製品、石器	8世紀後半から12世紀の竪穴建物、掘立柱建物を検出した。		
要 約								
調査地から竪穴建物や掘立柱建物が出た。竪穴建物は今回検出された遺構と同規模で同様な形態のカマドを有する遺構が調査地南側の上地区で検出されている。掘立柱建物も計画方位が近似しているものが検出されており、上地区から中郷地区への遺構の広がりを確認できた。								
土木工事の届出日	平成30年9月5日		遺物の発見通知日		令和元年8月1日 (1文財第414号)			

筑後国府跡  
ー第293次発掘調査報告ー  
久留米市文化財調査報告書 第418集  
令和2年3月31日  
発行 久留米市教育委員会  
編集 久留米市市民文化部文化財保護課  
印刷 永松印刷株式会社  
久留米市中央町20-22